

## 特別講演 1

### 「胆癌宿主におけるサルコペニアとその対策

#### ～抗炎症に着目した補剤の新知見～」

三重大学医学部附属病院ゲノム医療部／ゲノム診療科教授

奥川 喜永 先生

胆癌宿主において低栄養を高率に発症し、がん終末期にはその頻度は8割を超えるほか、がん関連死亡の3割が低栄養に起因する可能性が報告されている。またがん悪液質は骨格筋量の減少と筋力低下を認める症候群であり、その発症には、がんに伴う全身性炎症反応亢進が深く寄与する可能性が欧米を中心に示唆されてきた。そもそもがん患者に認める炎症反応亢進は、Hallmark of Cancer (がんの特性) のひとつとして2011年から報告されており、がんと炎症は密接に関連することが明らかとなっている。2019年に発表された低栄養の世界的診断基準であるGlim基準においても全身性炎症反応亢進は、病因のひとつとして明記されているほか、2023年8月にAsian Working Group for Cachexia(AWGC)より提唱された、アジアのあらたな悪液質診断基準のなかにもCRP高値( $\geq 0.5\text{mg/dL}$ )が明記されている。このような背景の中、我々がこれまで行ってきた胆癌宿主における全身性炎症反応亢進のサルコペニア・フレイルに与える影響を報告し、また抗炎症に着目した新たな支持療法のひとつとなりうる補剤の可能性を議論する。